

# ドイツ文学わき道散歩(15)

空中ブランコの揺れる様子を「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」と表現した詩人がいる。またしてもドイツ文学とは関係のない話だが、来年は中原中也が生誕して丁度100年を迎える。彼は30歳でこの世を去るまで一度も定職に就いたことはなかった。二日酔いの状態を「千の天使がバスケットボールする」と歌ってみたり(『宿酔』)、故郷の風には「おまへはなにをしてくる来たのだ」と言われたりする(『帰郷』)。夭折の詩人が残した詩は多くはない。全集には京都時代に傾倒したダダイズムの影響が色濃い初期の詩や、胸を刺すような感性溢れる詩に加え、フランス詩の翻訳が収録されている。中でも多くを占めるアルチュール・ランボーは、中也に仏文学を開眼させた友人であり彼とは深い縁ある小林秀雄にとっても特別な存在であった。二人の訳した同じ作品を並べて読むもまた一興である。

翻訳に必要なものは、語学力のみに留まらない。とりわけ文学作品に至ってはその魅力は逐語訳では伝えきれず、寧ろ文学的才能や感性が問われると言えよう。その意味で詩人ほど詩の、小説家ほど小説の翻訳に向いている者はいないのかも知れない。そこで、ドイツ文学を翻訳で読むなら是非ともお薦めしたい作家がいる。

森鷗外は言わずと知れた明治の文豪で、ドイツを舞台とした小説『舞姫』が自身をモデルとしていることから有名なように、ドイツ留学の経験を持つ医師でもある。軍医としての華々しい経歴や文豪としての名誉に包まれた晩年、「石見人 森林太郎として」埋葬されることを望み、翻訳の際も本名である「森林太郎」の名でアンデルセンの『即興詩人』、イブセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』などの北欧文学、そして多くのドイツ文学を日本に紹介している。今日でも名訳として他の追随を許さない翻訳作品のひとつに、アルトゥール・シュニッツラー作『みれん』が挙げられよう。シュニッツラーは鷗外と同年生まれのオーストリア人で、同じく医師であり作家であった。世紀末ウィーンの退廃的な雰囲気や漂わせ、鋭敏な心理描写で男女の姿を描いたその作風は、100年の時を経てなお現代にも通じ得る近代性をはらんでいる。スタンリー・キューブリック監督の遺作で、トム・クルーズが主演した映画『アイズ・ワイド・シャット』も実はシュニッツラー作品が原作となっているのである。

さて、『みれん』は原題を „Sterben“ (『死』)という。余命いくばくもないと宣告された男とそれを支える女の物語は、男の病状が進むにつれ少しずつ、しかし確実に二人の心に変化をきたし進んでいく。男の未練は命だけではなかった。読み終えると、この小説のタイトルはやはり『みれん』なのだと思わずにはいられない作品である。旧仮名遣いを障害と感じる方にも、それを差し引いて余りあるこの「森林太郎訳」作品の味わいを知っていただきたい。

ところで、登場人物の心情変化が劇的で衝撃的なドイツ文学作品と言え、皆さんは何を思い出されるであろうか。ある朝突然一匹の毒虫になった男の話?けれどもこれは別のお話、またの機会にお話することとしよう。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり